1990.7.25

CYRニュース No.25

幼い難民に未来を

発行：幼い難民を考える会　〒160 東京都新宿区南元町6－2　TEL. 03-3353-9947　FAX. 03-3353-9739

「本国帰還」をカンボジア難民はどう受けとめているか

「技術訓練センター」と名称が変わったカオイダンキャンプ（入口）

今年（1990年）1月16日からカオイダンキャンプは「難民収容所」から「カンボジア本国帰還者のための技術訓練センター」へと、その名称を変えました。これは、タイ軍からUNHCR（国連難民高等弁務官事務所）とカオイダンキャンプで活動している民間団体宛に文書で通達があったものです。しかし、タイ軍も、UNHCRも、かんじんのカオイダン住民には正式に知らせていません。幼い難民を考える会（CYR）では1月25日の難民責任者会議で、この名称変更を伝えました。

キャンプの名称が変わってもCYRのプロジェクトは基本的に今までと大きく変わることはありません。キャンプを出てからも自立した生活ができることを目標にプロジェクトを運営してきたからです。

一層力を入れることとしては、技術訓練の教室では、カンボジアのワーカー（指導および製品をつくる人）全員が生徒に教えられるまで技術を高めること。例えば織物では、今まではむずかしい工程部分は技術をもっている人だけがやってしまいがちでした。これからはワーカー全員が実際にやってみて、経験を積み自分のものとできるようアドバイスしたいと思います。

洋裁では2月から、生徒の中から希望者を募り、採寸と型紙のとり方を重点に3週間集中的に指導者養成トレーニングを行

ないました。技術のある人のほとんどが第三国に出てしまったからです。

もう一つ力を入れたいのは母親への教育です。保健衛生や、身近にある栄養豊富な野菜、果物をつかった料理、病気の知識、ケガや事故の防ぎ方、けがの応急手当など、自国に帰った時に役立つ知識を身につけ、回りのほかのお母さんたちにも教えられるようになってほしいと願っています。

中立キャンプ構想

各国のNGO、国連が何年も前から主張（タイ政府は昨年あたりから）しているのが国連が管轄する中立キャンプの必要性です。反カンボジア現政権であるポルポト、シアヌーク、ソンサン各派の勢力下にある国境沿いの避難地には、まだ30万もの避難民がいます。この人たちは各派の兵力や武器の運搬人として使われ、戦況にあわせて移動させられるなど、全く人権を無視した扱いを受けています。中立キャンプをつくることにより、この人たちの安全を確保し、自分の意志で帰還を決定できるようにしようというものです。と言って新たにつくるのは経済的、政治的にもむずかしい問題がたくさんあります。そのため、各派の影響下にない実質的には中立キャンプの「カオイダン」の規模を拡大し、国境の人々を一時的に収容し、カンボジアへ帰るための技術訓練をするという構想が出ています。タイのチャチャイ首相が、その実現のために日本など各国にも働きかけていますが、この中立キャンプ構想がはっきりするのは、8月のタイの総選挙後になりそうです。

カオイダンの女性へのアンケート

第三国への定住面接が昨年5月で打切りとなったため、カオイダンの住民に残された道は本国への帰還しかありません。

この本国帰還を当の住民たちはどうとらえているのか、IRC（教育プロジェクトを担当しているアメリカの団体）が昨年10月から12月にかけて行なった「技術訓練と職業に関するカオイダンの女性の関心」の調査から見てみましょう。この調査はカオイダンキャンプに住む、15〜50歳の女性 500人（全女性の19・7％）を対象にしたものです。この中で今後の計画を聞いた質問に対し、

第三国へ行く	300人
カオイダンで定住を待つ	143人
帰還する	1人
無回答	56人

という結果が出ました。

UNHCRやタイ政府が立てている帰還のための計画と、カオイダン女性自身が描く未来には大きな隔たりがあることがわかります。

（しかし、このアンケートから半年以上経った今は、第三国への夢を諦める人も増えているようです。）

「技術訓練と職業に関するカオイダンの女性の関心」アンケート結果

●プログラムへの参加の有無

参加経験者 382名（76.4%）

（多い順に ―洋裁、英語、栄養、料理、衛生）

不参加者　118名（23.6%）

理由：子どもが小さい、文盲、病気

●これから受けたい訓練

（多い順に ―英語、農業、洋裁、音楽、タイプ

●カオイダンの生活はどうか？

食べ物が少ない／退屈／国にいた時より楽しみが多い／まあまあだが窃盗が日常的になっている／毛布が不足

●アンケートからわかったこと

- 年齢にかかわらず職業訓練や教育への関心は高い
- （職業としては）農業、商売に対する関心が高い
- 言葉、農業、洋裁のプログラムは魅力がある。

ある小学校の先生に将来の夢をインタビュー

「初めのうちは、第三国への定住を望んでいましたが、自分の中にある愛国心に目覚め今では一刻も早く国に帰りたいと思っています。国へ帰ったら、農業を営み、カオイダンの経験を生かして学校の先生もやりたいと思っています。いちばんの不安は、経済的なことです。無一文の状態からどうやれば立ち上がることができ、家族を養っていけるのか……。

キャンプ内でも、現在のカンボジア国内の様子は、新聞やラジオで知ることができます。友だちの中には私と同じように、早く政治解決がついて国に帰りたいと言っている人と、どうしても帰りたくないという人と2つに分かれます。

私は、もしカンボジアへ帰ったら、どんなに生活が苦しくても、2度と国から離れたくないです。　（聞き手　福原香）

空回りする「自主帰還」

去る3月、38人目の在タイスタッフとして、湯山佳代が着任しました。これは、カオイダンキャンプに初めて入った日の報告です。

カオイダンキャンプで、一通りCYRの活動を紹介された後、一人で自転車に乗って出かけてみました。まず一体どれ位の広さであるのか見当もつかない程広く感じられました。迷子にならないか心配しましたが、さすがに人工的につくられただけあって、碁盤の目のように区画が整理されていて、迷いようもありませんでした。カオイダンの山の緑とは対照的に太陽に照りつけられた赤土は水気を失って埃っぽく、人間の居住に適しているとは決して思えませんでし

た。水も外部から持ち込んでいる状態で、24時間ここで生活している人は、さぞ不便だろうと察せられました。一般的には難民キャンプの中は、キャンプ外のタイの農村と比較すれば、衣食住も満ち足りていて、決して貧しくないと言います。確かに、CYRの保育者を見ても、最低限の生活は保障されているのはわかります。しかし、人間が主体的に何かを行なうという基本的な権利が充足されていないことが短時間の接触ながらも感じられました。意志の決定権を奪い、生活だけ充足させるというのは言葉はきついでしょうが、まさに「飼い殺し」です。自分自身の将来を自分で決定できない状況の中で「主体性」を持つということは非常にむずかしいと思います。私自身はキャンプ内での様々な活動が、どれほど成果をあげたかということよりは、何年間もの間、数キロ平方メートルしか自由に行動することが許されなかった人々が、閉塞しきった日常の中で、自分のできることを見出し、問題を共有できる「場」が存在することに大きな意義があると思っています。

CYRの活動を見学してまず感じたのは、先達の苦労の跡でした。実際に現地に行ってみて、保育も定着し、子どもが元気な姿で走り回る姿を見て安堵感がわきました。栄養不良からか髪が赤茶けていたり、見るからに衛生状態の良くない子どもたちもいましたが、迎え入れる保育者の安定感からか、子どもたちは元気いっぱいで、CYR10年の歴史を感じました。また保育教材は、竹にボルトをねじ込む形になっており、できるだけ現地で調達できる資材を活用する配慮が感じられました。

保育者に関しては、「教育者」として活動しているというよりも、基本的な健康管理のことなどを「保育園」という場を通じて学び、母親的に子どもと接している様子でした。カンボジアの女性というのは、かなり控え目で、自己紹介でも多くを語ろうとしませんでしたが、独特の母性的な雰囲気をもっていて、人間的な暖かみを感じました。興味の対象はやはり「家族」のことで、アジア特有の血縁の強さを感じさせられました。

キャンプに残された人の中で英語等、語学のできる人はほとんどいないと聞いていましたが、何人かの男性は英語も達者で、語学のレベルを考えると、キャンプ生活の長さが推測され（英語はキャンプに来てから学んだはずですから）定住に向けて必死に努力したのだろうと思われました。カンボジア人スタッフの一人は、3回も面接を受け、落とされたと聞きました。何を基準に面接でふるいわけをしているのか大きな疑問が残りました。カンボジアへの帰還に関しても、政治的解決に対して絶望的な見方をしている人がほとんどで、帰りたくないという人のほうが多いようです。「自主帰還」という言葉だけが空回りしている状況が伝わってくるようです。国連や外交筋が考えていることと、被害者である難民の人々の思惑があまりにも違うことが痛切に感じられました。

（記／湯山佳代）

希望の家レポート

●暑さの中でも元気な子ども

2月は毎週金曜日に散歩をしました。いつもゆっくりと畑のほうまでまわって帰ってきます。どんなに暑い日でも子どもたちは元気に出かけていきます。また、久しぶりに図書室脇の白板の絵も描き替えられ、ピンク、ブルー、みどり等の鮮やかな色で元気のよい絵が飾られています。たいていは日本人スタッフが適当な頃合を見計らって、絵の描き替えをしたら、と声をかけていましたが、今回は保育者のほうから絵を新しくしたいと話が出ました。

●新しい保育者で活気

保育者養成コースを受講中の生徒たちが、保育園の各クラスに加わり保育実習に当たっているので、子どもたちは保育者と一緒に遊ぶ時間が長くなりました。面接の時、消極的に感じられたのに、子どもと走り回って遊んでいるうち、みるみる生き生きとしてきた人もいます。また、初めのうちは、子どもとどのように接したらよいのかわからず、他の保育者のほうばかり気にしていた人が、トレーニングの終わる頃までには子どもと接するのが楽しくなり、子どもを指導する声にも張りが出てきました。また、実習生を指導したある古い保育者は、「何も知らない実習生を指導する」という責任感で、とてもていねいに指導にあたっていました。また実習生がなれてくると、自分も負けずにいつもより更に大きなはっきりした声で保育したり、古くからいる保育者にとってもよい刺激となったようです。

●真剣な顔で自転車の練習

「希望の家」の前の道を小学校高学年の子どもが自転車乗りの練習をしているのを見かけます。日本では補助輪のついた子ども用自転車で練習し、小学校入学前の多くの子どもは乗れるようになるのでしょうが、このキャンプ内では自転車を持っている家は少なく（CYRに勤めている60人中自転車のある家は、4、5軒くらい）とても大事にしています。また子ども用サイズもないので、ある程度大きくなってから練習を始めます。

稀少価値の自転車を、子どもの練習でこわしてはたいへんなので、倒さないよう、練習は真剣そのものです。この兄や姉の真摯な様子を、道の端でずっと見守っている保育園のイタズラ坊やの目も、いつになく真剣です。この園児がもう少し大きくなって、兄姉のように自転車練習をするのはいつの日、どこでなのでしょう。

ベトナムの子どもと私

兵庫県
伊丹市

川上 郁雄

2年前オーストラリアの教育実践を知るため、オーストラリア各地の学校を訪問していた時、ボランティアで授業をやらせてもらった。あるクラスで日本の箸について説明すると、「中国でも箸を使うよ」「ベトナムだって使うよ」と、アジア系の顔をした子どもたちが元気に答えてくれた。また、日本語のありがとうを教えると、「フィリピンではセラマポって言うのよ」と目をクリクリさせながら女の子が教えてくれた。アジア系の子どもたちが、自分たちの文化を堂々とクラスで発表している姿に、私は強い感銘を受けた。また、ある学校では、元難民のベトナム人の先生に出会った。「子どもたちの学習補助と、学校とベトナム人家族のパイプ役を果たすのが私の仕事です」と話していた。オーストラリアは、これまでたくさんの移民や難民を受け入れてきており、100以上の民族からなる多民族国家である。ある白人の先生は、「白人たちの価値観を学びなさいと彼らに同化を迫るのではなく、私たちが彼らの文化を学び、共に社会を豊かにすることを考えることが大切」と力説していた。文化多元主義教育の一端を見る思いがした。

帰国後、私は関西在住の、ベトナム人家族を訪問するようになった。これまで1年半ボランティアとして子どもたちの勉強を手伝う中で、日本語や学習の遅れに悩む子どもたちが多いことや、親たちや青年たちにも悩みがあることを知った。彼らに接するようになってから、私はベトナム語を学び始め、意外なことに気がついた。ベトナムの大人たちにベトナム語で話しかけると、すぐニコニコと話してくれるのに、子どもたちに話しかけると、そんな言葉は知らないといった顔をされることが多い。そのような反応をする子どもたちはベトナム語を「カッコウ悪い！」「勉強しても日本では役に立たない」と否定的に言う。家庭と学校での二重言語生活、二重文化生活を送る子どもたちが、このような言語観を持つなら、それはこれからの彼らの人間形成にどのような影響を与えるのであろうか。同化と、民族的アイデンティティーの相克というテーマは、日本社会とベトナム人社会との関わりの中にあるという意味で、彼らの問題であると同時に私たちの問題でもある。異文化を学び、社会を豊かにする教育や社会のあり方を、ベトナムの子どもたちとの関わりの中で、これからも考えていきたい。

難民と出会って

在ラオス

原田 恵津子

私がフィリピン難民収容センターで過ごしたのは、1986年4月からの2年間、青年海外協力隊員としての派遣であった。これが私の難民との初めての関わりであり、それまでは日本で定住難民の受け入れをしていることすら知らなかった。

私の任期中、多い時は17000人あまりのインドシナ難民が、第三国定住受け入れの前提条件として定住前の6か月間、定住先（主にアメリカ）の生活習慣、言語に関する教育を受けていた。私はこのセンターの医療サービスのスタッフの一員として活動

していた。

小児感染症の子どもは、感染症病棟（と言っても5床）に入院しなければならない。水ぼうそうの、あるカンボジアの少女は、ほかの誰かが語りかけても何も話さなかったが、交替で付き添う両親には「タオップティア！」（お家に帰る！）と言い続けていた。言葉や、人種の壁がそこにはまざまざと表れており、彼女には血のつながった両親と兄弟姉妹だけが頼りになっていることをつくづく感じた。

第三国定住が決まった難民の収容センターなので精神状態が安定しているためか、ほかの難民キャンプに比べ人々の表情も明るい。

第三国での希望に満ちた生活を現実のものとするために、希望と無限大の可能性の中で苦難をも乗り越えて、定住の場を見出してほしいと祈る思いであった。また，同じ人間として、外国人と日本人という隔たりをつくらず、共に歩み、生きていきたいと思った。

徐々に脱皮し、「人間っていいもんだな～」と思い始めた時期とほぼ一致している。この出会いなくしてピースボートへの参加はなかっただろう。またＣＹＲの存在を知り共感することもなかっただろう。

今回の旅で在日朝鮮人、在日カンボジア人と小生の３人で語り合う機会があった。小生を除き２人は“再入国許可書”を法務省から受け取らなければならなかった。また、“障害者手帳”を持つ（持たされた）友人とも旅を共にすることができた。そもそも“再入国許可書”“障害者手帳”の存在は何を意味するであろうか。

タイのバンコクで訪ねたスラム街。中国で聞いた旧日本軍により強制連行された方の証言、さらに万人坑で手にした人骨。ベトナムで訪ねたツーズー病院。カンボジアで訪ねたコンポンソム病院。どれをとっても今の小生には冷静に語ることができない。ただ、これらの経験が“自分なりの生き方”に大きな影響を与える予感がする。

小生にたくさんの出会いと考える材料を与えてくれた旅であった。これからもたくさんの出会いを通じて自分なりに頭の整理をしながら、“自分なりの生き方”を探りたいと思う。

生き方を考えた旅

東京都
文京区

伊藤 丈二

昨年12月、小生は初めて手にしたパスポートでピースボート※に参加し、タイ、中国、ベトナム、カンボジアを訪ねた。

その旅を題材としていざ原稿を書こうと思ったものの、訪れた国の方々（祖国を離れざるを得なかった方々を含む）の心情を察することができるほどの人生経験をしていないことが気になり、またペン（言葉）の持つ暴力性などを考えていると頭の整理がつくどころか、ますますわからなくなってしまった。

かつて自分の無知が友人（数年後本人から手紙が届き、在日韓国人２世であること、日本国籍がないこと、本名が〇〇であることなどを明かしてくれた）の心を深く傷つけていたという痛恨の思いが頭をよぎる。その時以来、人の苦しみ悲しみは、自分が経験しなければなかなか理解できるものではないこと、人を本当に思いやることの難しさ、心の傷、特に幼い頃に受けた傷は癒しがたいものがあることを自分に言い聞かせるようになった。

その友人と出会った時期が、かつての人間嫌いの自分から、

※ピースボート＝平和を考えるために、日本が関わった戦争の現地を訪れている大型船。ＮＧＯの１つ「ピースボート」が運営。

ふれあいのなかで

学ぶことの多かった出会い

打越 章子

Fさんとお母さんに逢ったのは、昨年7月の初めでした。ベトナム人の家族が、日本語を教えてくれる人をさがしているという話がそもそものきっかけでした。毎週金曜日、にわか日本語教師として片道1時間半通うことになりました。

8年前、日本に難民として来たお姉さんのMさんが、ベトナムの両親と妹2人を6月末に呼び寄せたのです。この家族は、日本に来るとすぐに近くの工場で働きだし、お母さんは専業主婦という何だか頼もしい家族です。お母さんと下の妹のFさんが生徒さんになりました。Fさんはこの一家の末っ子で21歳のお嬢さんです。2人とも全く日本語は話せない状態で、Fさんは英語を若干話します。初めは、本当に暗中模索。特にお母さんは、ベトナム語だけ。私はベトナム語がわからない。自分のことを棚に上げて、人のことを言ってはいけないのですが年齢からくる意欲のなさも加わって、ニッチもサッチもいかなくなるという状態。ひらがなも少しも覚えてくれません。7月の猛暑の汗なのか、冷汗なのかわからない様な始末です。

横からFさんが気の毒そうに「母はよく覚えません」

「50歳すぎて、ほかの国の言葉を覚えるなんて冗談じゃないわよね」 —— 私は思わず日本語でお母さんに言いました。

「そうそう」とお母さん。これはベトナム語。不思議なことに、この時、私たちはベトナム語と日本語でしっかり気持ちが通じ合ったのです。

私はベトナム語をお母さんに教えていただくことにしました。あまり意欲的な生徒ではなかったお母さんが、猛然と意欲的な先生になってしまい、私はかなりしごかれました。おかあさんは、もつれた糸がほどける様にひらがなも覚えていきました。お母さんの書くひらがなはおおらかで美しいのです。

一方お嬢さんのFさんの頭の良さには毎回感心しました。世の中にこんなにも頭の良い人がいるのかしらと思うほどです。なによりも胸を熱くしたのは、意欲の旺盛さで、常に日本語を学ぼうとする情熱には、教えている私が、思わず感動して涙ぐんでしまったこともありました。

日本語にベトナム語の訳がついた便利な教科書もありましたが、思うところあって、小学2年の国語の本と、中川李枝子さんの「そらいろのたね」を使ってみました。ところが、2年生の本とはいっても、立派に日本の独特の文化といったものが、しっかりと盛りこまれてあってこれをどう理解してもらおうかと様々な工夫をしなければなりません。絵を描いたり、ジェスチャーをしてみせたり、拙い英語を使ったり……。Fさんは、はっきりした日本語で「わかった、わかった」。私はちょっと自信のないベトナム語ですけど、彼女の理解力の素晴らしさに、「アントオ」（貴女は偉い！）

一生懸命日本語の勉強をするカンボジア女性。

わずか3か月でFさんは、日常会話はできるようになりました。そして11月の半ば、一家は入所を申し込んでいた姫路の定住促進センターに入ることになり、思いがけない別れがきました。お母さんが両手を拡げます。私はその上に私の両手を重ねます。せっせっせのあの感じです。ベトナムの別れの握手のようです。2人の思いが通いあいます。お母さん、Fさん、お2人に逢えて本当によかったです。私こそいろいろなことをお2人から学ばせていただきました。「カモンラン」（ありがとう）

前向きな一家ですから、きっと日本で明るい将来を築いていくことでしょう。大学の理系に進みたいと願っているFさんはきっとその夢を可能にすることでしょう。

「ガングレン」（がんばって！）

この子はどこで暮らすことになるのだろうか。
（国際救援センターにて）

「親子の絆」を思うとき

秋沢 ヒロ

「親子の絆」という言葉は、古い言葉ではあるが、今もって無関心ではいられないことがらである。

私がインドシナの人たちと関わりをもってもう10年になる。その間、いろいろな背景をもった親子に出会い、生活にも関わってきた。

特にベトナム人の施設に勤めるようになり、通訳が身近にいることも手伝い、より事情がわかるにつれ、親子の関わり方とともに親が子どもに与える影響を考えずにはいられないことがたびたびある。

親が病気になり、子どもと離れて生活しなければならなくなった場合、子どもに与える影響はその周辺にいる大人が特に細心の注意をもって見守ってあげる必要がある。

あるベトナム人の母親が入院し、手術を受けるため、3人の子どもが施設に預けられたことがあった。下の子どもは乳児院へ、上の2人は養護施設へと、母子は3か所の施設へ離ればなれとなってしまった。

その間、真ん中の男の子A君は、1度退院した母親の許に戻ってきたが、再手術が必要なためまた母親と離れ、前回の施設とは別の施設に今度は1人で預けられることになった。前の施設は満員ということであった。しかも、上の子は姉の住むオーストラリアへ定住してしまった。

A君はいつも、状況の変化に対して心の動揺を隠そうとするのか、無意識の反抗か、迎える母に対しても、私たち職員に対しても、いつも無関心を装っていた。最初の施設の時は、職員の好意で1か月に1回、母親を見舞うことができた。おしゃべりを続ける姉のそばで、1人むっつりしていて、帰るまでひと言もしゃべらなかったのに対し、母親は「あの子はベトナム語を忘れてしまった」と淋しそうに

ふれあいのなかで

言った。

2年経ち母親は2回の手術のあと退院し、ベトナム人の施設に戻った。今年小学校1年に入学したA君は母の許へ引き取られた。1歳の誕生日直前に預けられた妹は、まだ乳児院に預けられている。

しばらくしたら、妹も加わり3人の生活になるだろう。2年間の別々の生活を経て、この親子には新たな試練が待っている。

この親子を見ていて、私たち大人は、子どもに与える影響をもっと子どもの立場に立って考えなければいけないと思った。

母親の病気によって、親の世話を受けられない子どもが施設に預けられるのは、仕方のないことと大人は思う。しかし、子どもにとってはどうだろうか。本人は理解できないことであっても、意思表示できないうちに大人によって実行されてしまう、親の事情によって、子どもの意志を無視されたことが行われる場合、眼に見えない傷を負わされるのはいつも子どものほうである。

この親子だけでなく、インドシナの国々を離れて日本にやって来た人々は、平和な日本に生まれ育った私たちが体験し得ない困難、苦しみを乗り越えてきた。彼らから私たちが学ぶことはたくさんある。彼らの経験を通して、子どもに与える影響というものについて学ぶことができる。そして、私たち大人ができることは何なのか、平和な日本と言われる今、ゲームソフトを買うために夜を徹して1万人の行列ができる。これも平和だから起きる現象なのだろう。

でも、もっと視野を拡げて、1人1人が「平和」を真剣に見つめなければ、次の時代を担う子どもたちを育てられないのではないだろうか。

いちょう団地でカンボジアのお正月

今年で3回目となった“地域の人と祝うお正月”。今年は神奈川県大和市にあるいちょう団地で行いました。主催は、下和田・上飯田いちょう団地在住カンボジア人、後援が幼い難民を考える会です。

当日の4月8日の日曜日は、あいにく「春の嵐」のような天候。カンボジアでは1年中でいちばん暑い、雨とは無縁の季節なのにとうらめしい思いもしました。

それでも、お坊さんの読経が始まるころにはかなりの人たちが、会場になっている集会室に集まりました。団地の日本人のお年寄りや自治会の方たちも、「カンボジアの人に誘われたので」と、参加してくれました。

お正月に欠くことのできない“砂山の儀式”の用意をしていると、カンボジアの子どもたちがめずらしそうに覗き込んでいました。本当は外に大きな砂山をつくるそうですが、雨のため室内に小さな砂山をつくったのです。日本のものよりずっと長い、花火のようなお線香に願いを込め、砂にさします。団地のカンボジアの女性たちがつくってくれた料理の数々を味わったあとは、輪になって踊りが始まりました。

このお正月の行事は、カンボジアの子どもたちにとって、母国の文化にふれる貴重な経験となったことでしょう。

僧侶が歩けば……

——タイ、カンボジア行脚の旅

渋井　修

バンコクにあるワットパクナム（パクナム寺）を出発してから12日目、東海岸の一番端に位置するハードレックの村まで行くことにする。途中5か所の検問所があった。さすがに国境の町だなと感じたのと同時に、私が僧侶でなかったらおそらくハードレックの村までたどり着けなかったんではないかと思った。タイ僧の衣を着ていたがために検問所でも何一つ問われることもなく通過することができたんだと思う。

村に着いて寺を訪ね、住職に宿泊を願いでた。この寺には住職のほかには一人も坊さんがいないので、気楽に過ごせそうな気がした。住職に本堂に案内され、ここで寝泊まりしなさいと言われた。

住職の話によると、この村の人口は約 220～ 230人ぐらい、所帯数にして40～50ということである。しかし国境を警備している兵士は住民の数より多く、300人を越しているとも言っていた。確かに村の中をちょっと通り抜けただけなのですが、いたる所に兵舎があり、まるで軍隊の駐屯地の中に村があるみたいです。夕方、海を眺めていると、軍の桟橋から完全武装した兵士が2人、エンジン付きのゴムボートに乗り込み、沖の漁船を一隻一隻丹念に調べていた。夜のとばりがおりると、兵舎から音楽が流れ、陽気に戯れている姿が容易に想像できた。ほとんどの者が20～25歳までの若者のようであった。

この国境の村に来たのは、十数年前のベトナム戦争、そしてラオス、カンボジアへと飛火のように広がった戦いが、今国境付近でどのような状態にあるかを、自分の目で確かめたかったからです。戦争あるいは戦闘という言葉は日本人にとって遠い過去の、あるいは他の国のことのようになりつつある今日、一般の道路で完全装備をした兵隊をみることはほとんどなくなりました。でも、国境をいくつも接している地域では、戦闘という言葉は日常語であり、いつ起こっても不思議はないのです。海の警備も単に漁船を調べるだけでなく、この付近の海域には海賊も出没するので、その警備にもあたっているとのことです。海賊というと、今どきいかにも古めかしく、映画や小説の世界のものだと考えがちですが、ここハードレックでは今でも生きている言葉なのです。

〈筆者プロフィール〉

演劇、農業の経験を経て仏門に入る。87年7月タイに渡り得度。ベトナム戦争の頃、多感な青春時代を過ごした筆者は、非業の死を遂げた何百万もの人の霊を弔うためインドシナに行くことを決心。タイのパクナム寺院を拠点として、89年12月に1回目の旅に出発。タイ・カンボジア国境からカンボジアへ向かった。現在は2回目の旅でカンボジアに滞在中。

支部だより 岡山

支部の会報『アプサラ』ができました

昨年（1989年）7月に誕生した岡山支部では、幼い難民を考える会が満10周年を迎えた今年の3月に会報誌創刊の運びとなりました。

1987年に初めて岡山で現地活動報告会やキャンプの教育活動のビデオ上映会を開いてから昨年夏までは、単発的な集まりに終わっていたのですが、ようやく、89年7月から継続的に「考える場」を設定できるようになりました。どのように学習会を続けようかと考えていた時に起きたのが「偽装難民事件」を初めとする様々な出来事でした。10年かかって誠実に築いてきた日本での生活を、とてつもなく大きな不安で覆われてしまった在日インドシナの大人や、つらい思いをした子どもたちが大勢います。この時に、「考えること」「伝えること」の大切さを再認識させられました。10年前に、会の名前を決める時、幼い難民を「救う」でも「保護する」でもなく、「考える」会とした先達の読みの的確さを感じたりもしました。

私は、難民問題とは、政治・経済・宗教・法律というあらゆる側面を持った「時代の課題」であり、今の私たち日本人にとっては、飢えてかわいそうなよその国の人たちに何かしてあげるというレベルのものではなく、国際的に人権感覚を問われている問題であると思います。

会報の名前の「アプサラ」はカンボジアの伝統舞踊の「アプサラダンス」からとりました。アプサラは、水の妖精です。

会報誌「アプサラ」は、毎月発行の予定です。情報ネットワーク誌として活用していただけるようになれば望外の幸せです。

（記／成澤貴子）

岡山支部では毎月学習会を開いています

☆今までの学習会☆

89年9～11月　難民問題を考える（条約難民と政策難民等）

12月　辛くておいしいインドシナ料理パーティー

90年2月　東南アジア福祉施設視察報告

3月　タイ東北部でのワークキャンプ体験報告会

4月　ピースボート（東南アジアの国々を歴訪）報告会

5月　在日ベトナム人社会と私たち

☆毎週月曜日は打合せ・作業日

19時から岡山YMCA（岡山市中山下1-5-25）にて

宛名書き、会報の編集、学習会の打合せなどを行っています。お手伝いしてくださる方、またおしゃべりしたい方、どなたでも1度のぞいてみてください。

岡山支部＝〒701-11　岡山市津高207-10　成澤貴子方
☎　0862-55-1716

『竹の子レポート』発行します

関西では、姫路、神戸、尼崎、八尾、茨木などの地域単位で各グループが個別に活動していることが多いため、情報交換の必要性が高まっています。ここ1年半ネットワークづくりを考え続けてきましたが、7月から、1か月半に1回程度のペースでB4サイズ1ページ程度の情報紙「竹の子レポート」を発行することにしました。各地域での活動の様子、合宿の案内・報告、などを載せていく予定です。

ゆくゆくは、定住した人たちに直接かかわってもらい、定住者に必要な情報を提供したいと考えています。

そこで求む協力者！

いっしょに編集作業をしてくれる方をさがしています。ご協力いただける方ご連絡ください。

大阪支部だより

大阪支部＝〒573 枚方市枚方元町4-31　メゾン花 303
☎0720-43-3380　中野能行方
（編集部の手違いで、前回24号の大阪支部の電話番号を間違えました。すみません）

大分 パネル展報告

昨年10月13日から23日まで、大分市にある病院の温泉棟で、パネル展とチャリティーバザー「幼い難民に未来を」が開かれました。企画者の松山医院の松山まり子さんにその報告をしていただきます。

私は今まで、温泉施設で集まる寄付金をCYRやそのほか2、3の団体に送らせていただいてきました。こうした団体がどういう活動をしているのか私自身も活動内容を詳しく知りたく、また1日 200人以上来院する病人または半病人に何かを訴えたくて開催しました。主催は私もメンバーになっている、環境問題などを考える市民団体の「グループ宇宙船」です。内容はパネル展のほか、バザー、お琴の夕べも1日設けました。チラシの一部を紹介しましょう。

「難民たちの生活は、全く違う世界のことではありません。地球のどこにいても、お月さまは見えます。どこから見ても同じお月さまです。同じ時代に地球の上に生きるものとして、彼らの痛みを感じ、理解するものでありたいものです。

月明かりの下、お琴の調べを聞きながら、1日も早く彼らに安らかな日々が戻るようにみんなでお願いするのも、今、私たちにできる一つの確かな方法に違いありません。」

同じ地球に、同じ時に縁があって生まれてきた人間同士として、知らないふりでは難しいと、たくさんの人々に想ってもらえることが、パネル展の意図です。

相手に自分を押しつけることのない、互いに受入れことのできる援助のあり方を、これからは幼い難民を考える会を通して学ぶことができればよいと思います。

この次のパネル展を開くまでに、インドシナの方に大分に来ていただき、私たちの仲間と会って、身近にいろいろなことを感じさせていただける集まりに育てていきます。

（記／松山まり子）

INTERVIEW

外国人留学生医療ネットワークをつくった

小林 米幸さん

今年（1990年）1月、神奈川県大和市に英語、フランス語、ベトナム語、カンボジア語、北京語、広東語、潮州語、韓国語の通訳つき（電話の通訳を使えば、ラオス語、ヒンズー語、ウルドゥ語、スペイン語、ポルトガル語にも対応できる）で診察を受けられる国際クリニックが開設されました。この病院を開設したのは、大和市立病院で8年間外科医として勤務し、大和定住促進センターの嘱託医でもあった小林米幸氏。

「診療するうえで、言葉の壁はやはり大きいですね。外国の人たちにとっては、母国語で診察を受けられれば、不安感も少なくてすむはずです。ところが実際には、言葉がわからないために、医師が症状を正確に把握できず、重症におちいらせてしまう場合もあります。患者本人は訴えているつもりでも医師には伝わっていなかったり、医師の説明を十分に理解できないということはよくあることです。」

こういう不都合をなくすため小林さんは病院を開いたと言います。小林さんの専門は消化器科と外科。奥さんが小児科を担当しています。

1日に40〜50人来る患者のうち、外国人は1、2人。週末になると4、5人に増えるそうです。国籍は、カンボジア、ベトナム、ラオス、マレーシア、フィリピン、イラン、中国など様ざま。外国人1人を診ると、日本人3人分位の時間がかかるので個人医院や、病院から小林さんの所に紹介されてくるケースもあるそうです。

この小林米幸氏がメンバーになっているアジア医師連絡協議会（略称AMDA）が、4月20日には外国人留学生のために医療ネットワークを設立しました。AMDAは、11年前にインドシナ難民問題が起きた時、難民キャンプにかけつけた当時の医学部学生を中心につくられた組織で、医療を通じてアジア各国と相互理解を図ることを目的としています。日本のほかにも、タイ、フィリピン、台湾、韓国、香港ほか6か国に支部があり、新たに、ネパールにも支部の候補があるそうです。お互いの国で医師や看護婦の交換研修を行なっています。

「それまでもアジアとの接点を持ちたいと思っていましたので、2年前からメンバーに加わりました。AMDAの本部は岡山ですが、今回のネットワークの事務局は、私のところにしました。

日本でも国際化が叫ばれ、外国人登録をしている人たちだけでも90万人、登録証をもたない短期滞在者も含めれば 100万人も外国の人たちがいるというのに十分な医療を受けている人はほんのわずかしかいないのが現状です。その原因は、やはり言葉の不自由さが最大のものですが、そのほかにも経済的な問題、習慣や文化の違いもあります。

たとえば、敬虔な仏教徒の女性の場合、医師であっても男性の前で衣類を脱がなければいけないのは屈辱と感じるのです。医者も、そういう文化の違いがあることを知って、外国の患者さんが診察室に入ってきたら、まずその人の国の言葉であいさつするぐらいのことができるといいと思うんですよね。“病は気から”と言いますが、自分の国でやっていた仕事と全く違う単純な仕事しかできないとか、話し相手がいなくて淋しいとかいうことが原因で病気になることもあります。いろいろ検査をしても異常がない場合は精神的なものが考えられますが、普通の病院では患者の話を“よく聞く”こともなかなかできません。私はよく聞くように心がけているんです。

このネットワークに入っている病院は、現在私のところのほか岡山県と、沖縄県にあるだけですが、儲け仕事としてやっている訳ではないので、その点を理解して、賛同してくれる病院を増やすのがむずかしいんです。保険証を持っていない人には私のところでは10割の診療費をもらっています。これは最低の料金で、病院によっては15割、20割あるいはそれ以上とるところもあります。

東京には留学生、就学生、出稼ぎの人たちなど、外国の人が多いので、ネットワークに入ってくれる病院があるといいんですが……。

私の場合は、保険証を持たない人が来たら、まずいくら持っているか聞きます。検査はなるべくしないようにして、薬をまず出して様子をみます。ただ、安くあげるために病気を見逃してはたいへんですから、そのへんの兼ね合いはもちろん判断しますけど。薬は薬局にファックスで注文して、取り寄せてから本人に直接説明するようにしています。ネットワークでとりあえず目標としているのは、短期滞在者のための保険制度の確立です。毎月外国人の患者さんの数は確実に増えているので、長い目でみてやっていこうと思っています。」

小林国際クリニックの診療時間は、夕方5時まで。「採算を考えれば、もっと遅くまでやったほうがいいんでしょうが、まだ子どもが3歳と4歳と小さいので、今は子どものことも大事にしたいと思って……。ここを終わってから、横浜の自宅近くの保育園に迎えに行くんです。」このやさしさが小林さんの活動を支えているにちがいありません。

☆小林国際クリニック
神奈川県大和市西鶴間3-5-6-110
☎0462-63-0919　院長：小林米幸
診療時間：月火木金　9：15～12：00
14：00～17：00
土　9：15～13：00
水・日・祭は休診

☆菅波内科医院
岡山市楢津310-1　☎0862-84-7676
院長：菅波　茂
英語、ヒンズー語、ウルドゥ語、北京語、広東語の通訳あり。

☆沖縄セントラル病院
沖縄県那覇市与儀1-26-6　☎0988-54-5511 院長：大仲良一
英語、スペイン語、ポルトガル語、北京語、台湾語の通訳あり。

未だ「難民」と認められない人たち

「夫は数か月前から横浜の入国者収容所に入れられています。私ももうすぐ仮放免の更新に行かなくてはいけません。一人息子は耳の病気で1年間の治療が必要だといわれ、現在治療を受けています。もし、入管（入国管理局）に出頭してそのまま収容所に入れられてしまえば、もう希望はありません。私は息子と共に死ぬでしょう。」と、あるイラン女性は訴えました。

これは、今年の2月に設立された「アフガニスタン、イラン難民を救援する市民の会」の月例会でのことです。この市民の会は、アフガニスタン人の難民認定申請などに協力してきた日本人が呼びかけ人になり、結成されたものです。個人的な救援活動では限界があり、日本にいる外国人の人権は日本人が立ち上がらなければ守れない、と考えたのがそのきっかけと言います。代表はカトリック吉祥寺教会難民救援後援会の会長でもある栃折愛介さんです。

アフガニスタン難民やイラン難民の存在を知っている人でも、日本にいることを知っている人は少ないのではないでしょうか。アフガニスタンからは民族問題や宗教問題で少数派の人たちが、イランからはホメイニ体制や独裁政権に反対している人たちが、身の危険を感じて本国を脱出してきています。彼らは本国での生活を

「言論の自由、宗教の自由がない」「少しでも政府に批判的な言動があれば逮捕され、拷問をうけ、処刑される」「基本的人権が認められていない」と口々に語ります。出国後に妻や友人を処刑で失った人もいます。

日本が難民条約に加入しているから、平和で自由な国だから、という理由で日本を選んで出国したのです。なかには日本を選んだ訳ではなく、ほかの国に行く途中、乗り継ぎで成田空港に降りたときに偽造パスポートが発覚し、そのまま日本にとどめられている人もいます。

ほとんどの人たちは、難民認定の申請をして却下され、収容令や退去強制令を受けています。数日から数年、入国者収容所に入れられた経験をもっている人も多いようです。なかには、日本に8歳の子どもと2人で来たイラン男性が、子どもと引き離されて、8か月間も収容所に入れられたケースもあります。その間、子どもは施設に預けられ日本語だけの生活をしていたため、親子で言葉が通じなくなったといいます。

収容中に、仮放免の請求をし、それが認められると保証金を払い収容所を出ることを許されます。「仮放免」は、恩恵的に与えられる法的立場で、難民認定の申請をしたアフガニスタン、イランの人たちはほとんどこの資格で日本に滞在しています。そのため1か月、あるいは数か月に1度、入国管理局に出頭する義務があったり、あらかじめ決められた範囲（都道府県）内で行動するよう決められるなど様々な制約を受けています。それに加えて、出頭したとき、いつまた入国者収容所に入れられるかわからない不安におびやかされています。

「日本とイランの政府は仲がいい。日本は石油を輸入し、車やコンピュータを輸出している。そういう関係のほうが大事だから、難民がイランから出たとは認めたがらない。入管に行くと『日本は狭いから、400年前から法律で外国の人は入れないように決まっている。だからほか

の国へ行きなさい。』って言われる。」

ほかの受入れ国をさがすのにネックになっているのが、難民認定の申請をしてから結論がでるまでに時間がかかることです。1年から長い人では3、4年かかっています。そのためほかの国に難民認定の申請をしても、「長く日本にいるのだから日本政府が保護すべきだ」と申請書すら受け取ってもらえないことも起きています。

強制的に送還するにしても、相手国の承認が必要です。偽造パスポートを発効した国はまず受け入れません。また本国に帰ると迫害されると主張している場合は、その人が難民認定を受けていなくても送還しないことと入管法に定められています。つまり行き先はどこにもないのです。

日本で難民条約が発効した1982年から、90年5月末までに難民認定の申請をした人は869人。内、申請の取下げ138件。実質申請者731人。認定されたのは194人。（このうち約80パーセントはインドシナ難民）。500人以上の人たちが未だ難民と認められない人々だということになります。そのなかで最近特に増えているのが、アフガニスタン人とイラン人です。その実数や実態については、市民の会で現在調査が行なわれています。

インドシナ難民の場合は、国連の要請をうけ、難民条約に規定する「難民」か否かの審査をせずに人道的な立場から受け入れています。日本にいるインドシナの人6698人（6月末現在）のうち約6530人は難民認定を受けていませんが、特別在留許可を得て、定住しているのです。

しかしそれ以外の難民に関しては厳しい審査を行なっているため、ほとんどの場合難民と認められません。現在の難民認定では、迫害をうけるおそれがあり、しかもそれが十分に理由のある恐怖であるという証拠の提出を求めています。しかし、身の危険を感じて逃げてきた人が、そういう証拠を持って国を出ることはまず不可能でしょう。この証拠第一主義が最大の問題点となっています。

「日本人は、亡命者とか難民というと犯罪者と同じように考えている。」と、あるイラン人は嘆いていました。この人は日本に来て2年でしたが、今年の6月、カナダ政府に難民と認められ出国しました。同じ書類と証拠を提出して、日本では認められなかった人です。

日本の厳しい難民認定の壁の前で行き場を失っている外国人は、先の見えない毎日に不安を募らせています。5月末には、新しい入管法の施行を前に、将来を悲観して、あるイラン人が自殺をしました。

家族を連れて出国した人たちは、子どもが病気になるたび保険証を持っていないため医療費に苦しみ、学齢期を迎えても日本の学校に入れるべきかどうかで悩んでいます。このまま日本に居られるならもちろん日本の学校へやりたい、でも……。

銃声を子守歌に眠る子どもたち

がれきと化したレバノンのキャンプで犬と遊ぶ少年。（撮影／広河隆一）

1989年1月現在、約1500万人の難民が世界にいるといわれています。その約半数が18歳未満の子どもです。しかし、この数字はUNHCR（国連難民高等弁務官事務所）管轄下にある難民だけで、UNRWA（国連パレスチナ難民救済機関）管轄下にあるパレスチナ難民とUNBRO（国連国境救援機関）が管轄するカンボジア避難民は含まれていません。今回はこの数字にも含まれていないパレスチナ難民の子どもたちのことをとりあげました。

戦後45年間、日本は平和な時代を過ごしています。これとほぼ同じ期間、平和をまったく知らず、住んでいた土地を追われ、子ども時代も奪われている子どもたちがいます。それが、世界地図を広げても見つけることができない地「パレスチナ」を故郷とするパレスチナ難民の子どもたちです。パレスチナ人は、この地に代々住んでいる人たちのことで、民族としてはアラブ人に含まれます。

「世界の火薬庫」と言われるほど紛争の絶えない中東は、多くの日本人にとっては「産油国」や「砂漠の国」というイメージがあるだけの、遠い国々かもしれません。その中でイスラエルはキリスト教、ユダヤ教、イスラム教の各教徒にとっても「聖地」エルサレムがある、あこがれの国になっているようです。しかし聖地巡礼の旅に出かける人たちのうち一体何人が、この国に何十年か前までパレスチナの村々があったことを知っているでしょうか。

イスラエルは、1948年に独立を宣言したまだ若い国です。この前年の1947年、国連でパレスチナの地にアラブ（パレスチナ）とユダヤの2つの国家をつくるパレスチナ分割決議案が可決されました。これにより前代未聞の“国連による国家の創設”がなされたのです。この背景には、第2次世界大戦で多くのユダヤ人がナチスによって虐殺され、ユダヤ人への同情論がシオニズム支持者を増やしたことや、欧米各国が自国内のユダヤ人問題を解決したかったことなどが複雑にからまりあっています。シオニズムというのは、ユダヤ人の国を旧約聖書に出てくる“約束の地”シオン（エルサレムにあるソロモン神殿の建っている丘の名前でエルサレムの象徴となっている）につくろう」とい

う運動です。

国連の決議案は、そこに住んでいたパレスチナ人をまったく無視したものでした。当時の人口の約70パーセントを占めていたパレスチナ人に43パーセントの土地を、残りの57パーセントをユダヤ人に与えるというのです。この決議案にパレスチナ人と近隣のアラブの国々は反対しましたが、48年にユダヤ側が一方的にイスラエル国家の成立を宣言したため、第1次中東戦争が起きました。このとき約73万人ものパレスチナ人が難民となり、レバノン、シリア、ヨルダンなどアラブの国々やパレスチナ内のアラブの国土とされた地域などに逃れました。この戦争に勝ったイスラエルは支配地を決議案の1.5 倍にまで広げたのです。

さらに1967年の第3次中東戦争で、わずかに残っていたパレスチナの土地 —— ヨルダン川西岸とガザ地区もイスラエルが占領しました。このときも、40万を越える人々が難民となってヨルダンなどに逃れました。

現在約 300万人いるといわれるパレスチナ難民は、ヨルダン、レバノン、シリアなどにある難民キャンプやイスラエル占領下にあるヨルダン川西岸、ガザ地区、あるいは世界各地に住んでいます。占領地では、20年以上にわたる占領に抗議するインティファーダ（民衆蜂起）が、1987年12年から始まっています。近代的な武器を持つイスラエル兵に対し、パレスチナ人たちは石で対抗しています。このインティファーダにはたくさんの子どもたちも参加し、そのために銃で撃たれ、こん棒で追いかけられ、殴られ、連行されています。3歳くらいの幼児が逮捕されることもめずらしくありません。1988、89年の2年間で 800人以上のパレスチナ人が殺され、その4分の1は、16歳以下の子どもだといわれています。また、多くの子どもたちが、肉親が傷つき、死んでいくのを目の当たりにした経験をもっていることで精神的にも深く傷ついています。

ある15歳の少女は言いました。「世界のほかの子どもたちは、音楽や、お母さんが本を読んでくれるのを聞きながら眠るのに、なぜ私は銃声を子守歌に眠らなければいけないの？」

レバノンにある12か所の難民キャンプには約35万人のパレスチナ人が住んでいます。ここにいる子どもたちも、戦争しか知らずに育っています。あるときはイスラエル軍から、あるときはレバノンの民兵から攻撃を受けています。1982年の9月には3日間だけで、3000人ものパレスチナ人が虐殺されました。85年から87年にかけての「キャンプ戦争」と呼ばれる戦争では、キャンプを包囲されて、食料、医薬品がなくなったために飢えや栄養失調で死んだり、包囲を破ったために殺された子どもたちが数多くいました。餓死しそうになって、死者の肉を食べる許可を宗教指導者に求めたことは、日本でもマスコミで大きくとりあげられたのでご記憶の方もいらっしゃるでしょう。

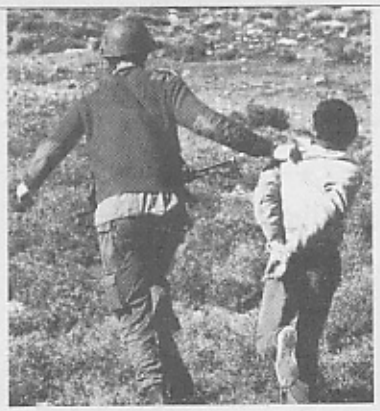
「1分間に4000発」と言われたほど猛烈な砲撃で、ベイルートのサブラ、シャティーラの両キャンプは廃墟となってしまいました。ある10歳の男の子は、自分の右手と左手の人さし指をからませて、必死に恐怖に耐えていましたが、ついに指がほどけ

82年9月、ベイルートのサブラ・シャティーラキャンプで起きた虐殺事件で犠牲となった子どもたち。
（撮影／広河隆一）

なくなってしまったといいます。

こうしたパレスチナの悲劇は今なお続いています。今年の5月20日にもイスラエルの国内で元イスラエル兵士がパレスチナ人に発砲し、7人が死亡、15人が負傷するという事件が起きました。これに抗議するデモに軍が発砲し、さらに何十人もの死者と千何百人もの重傷者が新たに出ています。

このような事件はイスラエルの占領という事態が変わらない限りいつまでも繰り返されることでしょう。最近では、占領地へのソ連からのユダヤ人入植者を奨励し、西岸とガザ地区までもイスラエルに併合しようという意図を露骨にしています。



デモに参加したためイスラエル兵に連行される少年。(撮影／大塚敦子)

1988年11月、パレスチナ国民議会はパレスチナの独立を宣言し、初代の大統領にPLOのアラファト議長を選びました。宣言では、占領地になっている西岸とガザに独立国家をつくるとしています。これは、かつてのパレスチナの地の25パーセントにも満たない国土で、一部のパレスチナ人たちから強い反発がありました。これほど大幅な譲歩をしたにもかかわらず、イスラエルは1度も話し合いに応じず、占領政策から併合政策へとさらに強硬な姿勢をとっています。

この絶望的な状況の中で、子どもたちは石を投げ続けることしかできないでいます。自由に遊べることも知らず、子ども時代も失ったままで……。

パレスチナの子どもたちに対して何かできることはないか模索中です。あなたのご意見をお聞かせください。

ネットワーク・他団体の活動紹介

くわしくお知りになりたい方へ

パレスチナの子どものことをもっと知りたい方におすすめしたいのが『子どもたちが標的にされている』 ――いま、パレスチナでは ―― という小冊子です。4年前からパレスチナの子どもたちへの援助を続けている「パレスチナ子供のキャンペーン」が今年の4月発行したものです。CYRの事務所でも扱っています。お問い合わせください。(☎03－3353－9947)

300円
〒175円

また、パレスチナ子供のキャンペーンでは、難民キャンプや占領地の子どもたちの様子を伝える写真展「占領と悲しみの現場から」を全国にひろげる運動を展開中です。参加ご希望、あるいはくわしく知りたい方は直接下記までお問い合わせください。なおキャンペーンの姉妹団体に“パレスチナの子供の里親運動”もあります。興味のある方は下記へご連絡を。

パレスチナ子供のキャンペーン
〒169 東京都新宿区百人町1-7-3
第3富士電工ビル 212号
☎03－3205－6824

パレスチナ子供の里親運動
〒169 東京都新宿区百人町1-7-3
第3富士電工ビル 211号
☎03－3205－1783

《事務局からのお知らせ》

お疲れさま！ 関口姉妹

ＣＹＲ設立以前から東京の事務局を手伝い、80年10月からは在タイスタッフとして約10年間活動してきた関口晴美さんが、今年５月末で退任しました。

ＣＹＲの顔でもあった晴美さんだけに、さびしい限りですが、しばらくは充電期間。10年間の疲れをとった後のカムバックを期待したいところです。

また、ほぼ同じ時期に晴美さんの姉・久子さんも、約５年間の任期を終え、帰国しました。カオイダンのカンボジアの人たちとはもうすっかり友人や親戚の付き合いになっていただけに、カオイダンの人にとって久子さんの帰国は信じられなかったようです。５年という長さは、晴美さんにつぐ記録です。

晴美さんのバンコクでの仕事はタイ人スタッフのシビカ・プラコブサンティスック（通称ゴイ）が、久子さんの仕事は在タイ２年の上田広美が引継ぎました。

織物プログラムの成果が一冊に

ＣＹＲがカオイダンキャンプで行なっている織物プログラムの成果が１冊の本になりました。カンボジアの伝統的なかすり織りの基本的な技術を、ふんだんなイラストとカンボジア語で説明しています。『カンボジアのかすり織り』頒価 500円。

東京事務局スタッフ紹介

峯村里香　６年前、ＣＹＲを紹介した新聞記事をにぎりしめ事務局を初めて訪れた。２度目の来所の時たまたま代表がいたため、それ以来事務局に勤務するようになった。最年少ながら事務局長を任されている。若いわりに古風な面をもっている。一見おとなしそうだが度胸がいい。今年の10月までは独身の予定。主に渉外、総務を担当。

鈴木イツ　82年から事務局にいる最古参。ＣＹＲの歴史のほとんどを共に歩んでいる。会員や寄付者のデータはすべて頭に入っている“ＣＹＲの歩くコンピュータ”であり、ＣＹＲの母親的存在。経理担当。

石井じゅん　85年からボランティアとして関わり、89年４月から事務局に。いつも机が見えない状態で仕事をしているため、周囲のひんしゅくを買っている。夕方６時以降はレインボー母に変身、ビールを片手に夕飯の支度をする。会報、「こんにちはＣＹＲです」、カンボジア語の相談などを担当。

後列左から、峯村、鈴木、前列左から石井、高橋、山崎の事務局の面々。

高橋あつ子　82年からの会員。製図、小唄教授を経て89年12月から事務局に。５年かけて放送大学をこの３月に卒業したがんばり屋。今の時代にめずらしい「律儀」「真面目」がぴったりする人。総務担当。

山崎尚枝（よしえ）　82年９月から12月までカオイダンキャンプのＪＭＴ（日本医療チーム）に看護婦として参加。84年から１年間はＣＹＲの海外スタッフとしてタイで働いていた。心身障害児の施設職員を経て90年４月から事務局に。ひょうきんというのか、明るい性格。国内活動担当。

ご寄付いただいた方々

1989年12月～1990年6月

（敬称略）

北海道　小川ヨシ　小山田彰　北桧山教会日曜学校　帰山ひとみ　砂田絹子　札幌聖心女子学院　松浦芳子　吉田文子　ロース幼稚園

青森県　佐藤美千代　白石富子
弘前学院聖愛高校宗教部

岩手県　佐藤重幸

宮城県　森合松美

秋田県　岩沢史征

福島県　藤田侑子

茨城県　小山友の会　河口久子　小菅聡・睦　佐藤生子　関口博美　豊田一郎　平戸昌子
山本満喜・泰路

栃木県　小山友の会子供部　須永知子　三橋恵子

群馬県　東別所B地区　藤田喜代子・洋

埼玉県　一志悦子　臼井保恵　柏木三知子　島崎友四郎　お田はんの会　東京聖書集会　藤原恭子

千葉県　磯島智枝　江戸川台子供の家　小林キヨ　国府台聖愛乳児園職員一同　佐々木秀子　鈴木啓子　鈴木健之　関根錦　曽我京子　土谷美知子　友澤こずえ　中崎みどり　服部三郎　濱谷きみ子　水野泉　三輪美枝子　麗澤大学難民問題研究会

東京都　秋重知子　浅井泰範　飯尾香織・美園　いいぎりゆき　飯田照明　池田透　石川東世子　石沢政子　磯部康志　伊津野文　伊藤和夫　井ノ部百合子　鵜沢知子　宇都宮紗智子　大鹿恵子　太田和　大滝弘子　大竹三千子　小沢篤子　香川澄子　笠原和子　笠原泰　川嶋茂嚴　菊地栄　菊池周子　北見アイ　木村久子　暁星学園幼稚園　キリスト教アジア資料センター山野繁子　国本正子　熊谷ことぢ　クラウスルーメル　栗野美代子　幸田成人　小岩教会教会学校　厚生省援護局援護課審査室篠田昌子　小島礼子　小林明子　小林智恵子　小林敏夫　小林治子　小林元治　駒場幼稚園田の会　小宮正弘　坂本憲子　佐久間羊子　佐藤国作　里美宏　澤田祐子　シャプラニール　庄司きよ子　真愛幼稚園　鈴木重子　聖アンナこどもの家　聖イリナモンテッソーリスクール　聖心会本部修道院　聖心会第二修道院　聖心会第三修道院　聖心会三光町修道院　聖心女子学院さつき会宗教サークル　聖心女子専門学校　聖心みこころ会社会事業部　聖パウロ女子修道会　関口久子　高江州朝子　高橋あつ子　高橋静子　高橋悠治　田島加奈子　田尻陽子　瀧口郁子　チャンタソン・インタヴォン　津賀都留子　つくしの会　津田綏子　手島悠介　東洋英和女学院東光会　中島朋子　中村育民　中村克夫　中村義子　永戸恭子　永良千秋　日本キリスト教団田園調布教会　日本キリスト教団碑文谷教会　根本昌子　畠中ルイザ　原葉子　平田昌秀　平山辰雄　船木しのぶ　フライングバード'84　堀内俊太郎　堀江徳子　前田清和　松岡享子　松本三朗　真鍋清加　宮垣満智子　麦の会　武藤徹一郎　武藤好子　村山みつ子　メリノール会　森田康子　師岡文男　モンテッソーリ御苑こどもの家　柳沼恵子　山崎康二　立教女学院　渡辺典子　渡辺道子　辰濃哲郎

神奈川県　石井征勇　畑老沢順子　大鹿理恵　大坪進　菊岡貞子　木船重昭　小久保卓二・ふさ子　近藤雅広　聖坂学園オリブ工房　善波弘代　高橋万里子　高橋良夫　田島敏子　たんぽぽの会　塚本迪子　堤義治　ともしび会　ドルカスベビーホーム　中村由子　長田邦稲　野間良晴　平野由美子　藤井節子　藤枝鮎　松井円・純　森戸潔　モンテッソーリ美しが丘こどもの家　八木本菊代　八重ゆかり　山田美楮子　横須賀三笠教会　横浜雙葉小学校　横浜雙葉中高校ボランティア委員会　横浜みこころ幼稚園　横堀雅子

山梨県　雨宮利雄　大東香代子　中村由美子

長野県　有賀芳子　岩井肇　円福友の会

新潟県　阿部清

富山県　大沢まり

石川県　日下典子

静岡県　佐藤緑　佐野克行　自然食品健康友の会　鈴木真樹　不二聖心女子学院　不二聖心女子学院温情の会　高根妙子　南荘宏・敬子

愛知県　伊藤洋子　井上道雄・貞子　橋本千穎　関口ひろ子　高橋仁見　豊田婦人ボランティア　長谷川正一　松山千恵

三重県　宇仁田愛子　廣方重俊

滋賀県　宮川潤造

京都府　伊崎佳明　谷口雅一　難民援助宮津カトリックの会

大阪府　秋田恭江　伊東峰明　今村眸　カリタス・ジャパン大阪支部　川畑美津子　菊地恵子　キリスト教保育専門学校　榊哲夫　聖母被昇天女子短期大学　呑野佳子　三浦正校

兵庫県　浅沼健一　稲畑美喜子　岡本タイヤ株式会社　小川正子　鍵山世都子　木ノ本みえ　黒田佳治　神戸平安教会婦人会　白井福太郎　中野清子　西宮一麦教会　橋本啓子　広戸重雄・紀子　松嶋吉則　水島惺　宮沢朔子　宮前峰子

奈良県　今村洋子　大方せつ　高島曜子　大和郡山カトリック幼稚園

岡山県　刈谷哲博　高木唱洋　日本キリスト教団岡山信愛教会

広島県　金尾アツ子　田川泰資　日本キリスト教団広島教会まきば会　宮川喜代子

山口県　久奈田雄　藤井操

香川県　小西ひとみ　田村保

愛知県　坂本敬子　松山友の会
高知県　池沢潤子　弘光宏行
福岡県　案津小百合　安藤玲子　木上絹枝　古賀徳子　日本キリス教団福岡玉川教会　福岡女学院中高校　福岡友の会幼児生活団　福岡雙葉学園生徒会　松添仁　みなと保育園
長崎県　高橋靖子　橋本奈美子　速見市子・ケサエ
熊本県　大津山数子・計喜
宮崎県　佐田恵子

新聞募金

北海道　松浦芳子
宮城県　森合松美
茨城県　佐藤生子
群馬県　庄司百合以
埼玉県　今村年伸
千葉県　斉藤祐美　坂内和子　笹尾正乃　篠田桂子　神庭信幸・道子　鷲見和佳子　友澤こずえ　矢ケ部留美子　吉岡俊吾・政江
東京都　安藤知代子　石井じゅん　伊勢谷悦代　今井かなえ　榎並瑛子　小沢篤子　香川澄子　交野政博　角谷諭三郎　栗野鳳　小菅喜美子　小林治子　佐藤和子　嶋本操　関口晴美　宗美樹子　高橋好子　田尻陽子　多野トシ　田村和凡　長島千枝　永戸恭子　野澤智子　萩原珠代　萩原美恵子　原田道子　平林みどり　広戸直江　松岡玲子　峯村里香　森律子　柳井克子　山極小枝子　山崎朋子　山田久美子
神奈川県　秋沢ヒロ　葦の会　井出貴江　伊藤恵子　大野力　小久保卓二・ふさ子　小島美子　志村悦子　鈴木イツ　田島敏子　二橋那美子　野原則雄　平野由美子　堀岡子　山崎尚美　山崎尚枝
長野県　内海鴻子　久世まゆみ　神津佳予子　小林けい子
静岡県　市川雅巳　高野比佐代　湯山佳代
京都府　田中唯男
大阪府　石丸伸司　李姫子　荻野芳子　斉藤裕子　㈱日本エミック　森瀾子
兵庫県　シスター石戸　加藤喜代子　中国帰国者の健康と生活を考える会
奈良県　大方せつ　宝田淑絵
岡山県　長谷川真子
香川県　小西ひとみ
福岡県　高瀬優子　高田まみ

ご協力どうもありがとうございました。

訪問ボランティア募集中！

次の地域で訪問ボランティアをさがしています。近くにお住まいで、継続的に関われる方にお願いしたいと思います。ご希望の方は事務局までご連絡ください。

★神奈川県横浜市
☆瀬谷区阿久和町（最寄り駅・相鉄線三ツ境からバス20分）日本語の勉強／夫婦と娘（在日１年）日曜日
☆保土ヶ谷区北宮田町（横浜駅からバス30分）日本語の勉強／女性（在日半年）　土曜日か平日の夜
★神奈川県藤沢市桜丘（最寄り駅・小田急線鵠沼駅）学校の勉強（高２）平日の夜または日曜日
★東京・江東区東砂（最寄り駅・東西線南砂町）日本語の勉強／夫婦　平日の午前中

コンピューターの入力を手伝ってくださる方

定期的に事務所で、会員、定住者などの名簿をコンピューターに入力してくださる方をさがしています。お手伝いいただける方、事務所までご連絡ください。

〒160 東京都新宿区南元町６－２
☎０３－３３５３－９９４７
幼い難民を考える会

CYRきのう・今日

タイ・カオイダン

1月29日～3月16日
第24期保育者トレーニング。17名の応募があり、面接と簡単な試験の結果11名が受講。

1月24～30日
保育園の子どもたちが歯科検診を受ける。ビスケットや甘いお菓子をいつも食べている子どもに虫歯が多かったが、さとうきびを食べている子どもには少なかった。

2月
COR（イギリスの団体）の織物プログラムでかすり織を始めるにあたりCYRの協力を要請される。CORのワーカー3名が織物教室に通い始める。

3月
帰還の際に配布予定のカンボジア語のアルファベットカー

ドの作成を木工室で始める。

3月23日
夜間十数名の強盗団がキャンプに侵入、住民1人が死亡、2人が負傷、1人が強姦される。賊もタイ軍との撃ち合いで2人死亡、1人重傷。この後しばらく住民たちは眠れない夜を過ごした。

4月7日
新年のパーティー。子どもたちは1か月も前からお正月の「花の踊り」の歌と踊りを練習。部屋の飾りもきれいにし、待っていた日だけに大いに楽しんだ。

4月
織物部屋の裏に桑の木を植える。蚕を飼って、絹の試産を検討中。

国　内

1月12日～17日
北海道札幌市の五番館で行われた「ナイスハートバザールイン札幌」にカオイダンの製品を出品。

1月20日、2月17日、4月19日
5月19日
アドバイスグループ打合わせ。10周年記念の催し、バザー、募金活動などについて話し合う。

1月23日
カンボジアの料理会。牛肉のサラダとスガオ・ムアン（すっぱい鶏のスープ）。

3月13日
10年間お世話になった広尾事務所のお別れパーティー。聖心会の12名のシスター方がお見えになる。

3月23日
新宿区南元町に事務所を移転。

5月24日
青森県弘前市にある弘前学院聖愛高校で事務局山崎尚枝がCYRの活動を報告。

5月26日
関口久子、タイでの4年7か月の任期を終え帰国。

5月26・27日
長野県でのホームステイに先立ち長野市と松本市で活動報告と難民問題についての説明をする。事務局山崎尚枝出席。

5月31日
関口晴美、タイでの9年8か月の任期を終え帰国。

6月3日
目黒教会のバザーに参加。カオイダンの製品や食料品などを出品。65,000円の収益があがった。